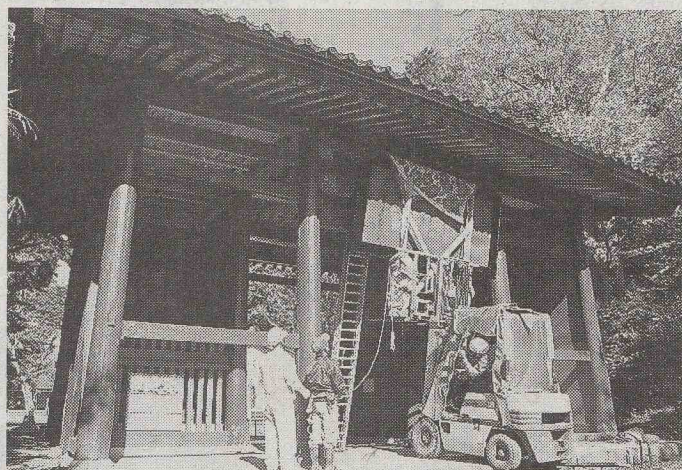


「仁王門」市民が修復

謙信が再興・上越の五智国分寺

上杉謙信が再興したとされる上越市の五智国分寺の山門(仁王門)が市民の手によってベンガラ色に修復された。現在の山門は火事で焼失した江戸時代の1835年に再建。同寺を遊び場にしていたという市民が私費を投じ、およそ3年をかけ、山門の扁額も鮮やかに復元した。同寺関係者も、「ずいぶん引き立ちました」と喜んでいる。

(内藤章)



私費を投じ3年 扁額も鮮やかに

修復したのは、市内で塗装店を開く小島清介さん(70)。火事で焼失した本堂が12年前に修復される際、再建に携わった設計者から老朽化した山門の修復の必要性を聞かされ、05年の初もうでに決意。翌年に計画書を作成し、市教育委員会の許可を得て私費での修復に乗り出した。

朱に塗られた仁王門。「安國山」の山号の額が掲げられた
|| 上越市の五智国分寺

山門は8本の柱が切り妻の屋根を支える八脚門で、市の文化財に指定されている。門の両脇には京都の仏師が刻んだという高さ2・7メートルの仁王像が立つ。

図面は残されていないが、修復には東京の文化財専門の研究機関や奈良・薬師寺の回廊の修復工事を担当した建設業者らの助言を得た。調べてみると、屋根瓦の破損による雨漏りや、シロアリの被害が予想外に深刻だった。

構造材の一部を交換し、色あせていた柱には朱のベンガラを30回も塗り重ね、さらに油性の塗料でコーティングするなど風雪に耐えるよう工夫を凝らした。

山門には長さ約3メートル、高さ約1・5メートルのヒノキの「安國山」の額が掲げられていた。

しかし、黒ずんでほとんど読めなかった。これを洗浄し、拓本の技法で筆致を確認し、額の縁は黒、文字は緑の岩絵

の具で鮮やかに彩色した。その過程で額の文字が東京・上野の寛永寺・東漸院第20世住職の書だったこともわかった。国分寺住職の高橋考深さん(75)によると国分寺は当時、寛永寺の末寺だったという。

3年がかりの修復をやり遂げた小島さんは「五智で焼かれたという瓦の修復も必要だが、多額の費用がかかり、いまは無理。子どもに境内で遊んだ寺なので、これからも大事に見守ってきたい」と話している。